

バ、時人中小別當トゾ云ケル、

〔愚昧記〕仁安二年九月十三日、午刻許、守光來讀書、又纔二尺餘、尼公一人入來、何爲見之、參御前、已希代之物也、忽裁終給衣一領了、是泉州住人云々、生年廿□□出家以前稱有夫之由云々、

〔陰德太平記 五十三〕赤松滿祐奉弑普光院殿附赤松家盛衰之事

滿祐ガ胸懷ニ弑逆ノ機發シケルトカヤ、サレ共猶モ義教公ヲ恨奉ル事、心肝ニ徹スル一事アリ、夫ヲ如何ニト申スニ、義教公ノ御寵妾ハ、西ノ御方トテ、滿祐ガ息女ニテ、鍾愛他ニ超、其勢ヒ御臺所ノ右ニ出ントス、サルニ依テ、將軍モ滿祐ヲバ殊ニ御心易キ者ニ御待對アリケリ、或時赤松ヲ始メ、斯波、細川、畠山、伊勢、其外ノ諸將ヲ召集サセ給テ、酒燕ノ興ヲ催サレ、酒既ニ酣ニ成テ、各々今様ノ音曲己ガ所得ノ藝能ヲ取出テ、一座嗽々タル折シモ、滿祐興ニ不堪、扇ヲツ取立騰テ、鳴ハ瀧ノ水トゾ謠ハレケル、滿祐ハ勝レテ長ノ土近ナル事、晏子、淳于髡ニモ勝リタルバ、人皆赤松ノ三尺入道トゾ稱シケル、サルニ依テ、將軍モ醉裡ノ興ニ乗ジ給ニヤ、勢ホソ儀也、舞ハ見マイナト、アラヌサマニ取囃サセ給ケル、滿祐無念ニヤ思ハレケン、扇高ク差翳シ、將軍ノ方ヲ屹ト見テ、備前、播磨、美作三ヶ國持タレバ、勢ホシトモ思ハズト押返シ、二三返諷テ、足拍子丁々ト、サモ音高ク踏レケレバ、其辭氣動搖ニ忿怒ノ意合テ、將軍ノ御心ニ感動ヤシタリケン、滿祐吾ヲ慢ルナメリト思召、御氣色ニ見エテ打シメラセ給フヲ、人々様々ニ執成テ、御酒宴ハ事ナク終ニケリ、

〔松屋筆記 百十二〕短小人

今茲弘化二年の正月、兩國橋東に短人戲場あり、短人兄弟年廿許にて、身丈頭より足下に至て二尺五寸餘といへり、琅邪代醉編廿七卷、長人の條、短人の條などに、晏子三尺に滿す、務光長八寸、張仲師二寸、朱厘の小人、元代外國所獻の小人、山海經の小人國などの事を載たり、

〔類聚名義抄 十少〕

少 書沼反、イトキナシ

〔同カ〕幼

イトケナシ